

北辺の劇創り

小さな演劇塾・菅村敬次郎

一. はじめに

北海道地図を見ると、稚内を頂点として右と左に美しい稜線が八の字に広がって見え、富士の姿に似て美しい。稚内から右、網走↓紋別↓斜里↓ウトロ↓知床半島までの稜線の外にはオホーツク海が広がっている。一方左側は、稚内↓手塩↓苫前↓留萌から石狩↓小樽を越え積丹半島へと連なる稜線となり、その外側には日本海の荒波が広がっている。

この二本の稜線に沿った北辺の町々では、北海道特有の雄大な歴史や産業の発展と共に、それぞれに独自の文化が誕生し根強く息づいてきた。とりわけここ数年、独自なねばり強い《演劇創り》を通して、見事な文化の花が開き始めている。その活動を取り上げ紹介したい。

実は、たまたまこの二年間に、苫前・紋別・斜里の三つの町で計六本も私の書いた拙い戯曲を上演して下さるという幸運を頂き、それを契機に電話やメールのやりとりが始まりついには昨年、斜里の地を訪問する機会を得てその劇作りを眼にすることが出来た。

二. 斜里中学校の挑戦

世界自然遺産「知床」を持つ斜里町、人口二二〇〇〇

人、農業・漁業・観光を主産業として発展してきた。学校は高校一・中学二・小学校九である。その中で生徒数も多く最も中心的な役割を果たしているのは斜里中学校である。昨年(二〇一五)一〇月、その斜里中学で全校挙げての演劇上演が行われた。《中学校で演劇》というだけならさして珍しくはないが、斜里中の場合その取り組みのエネルギーがもの凄い。三つの学年がそれぞれ一時間前後の劇を創り互いに鑑賞しあって競い合う。順位を決めるコンクールではないが全力で競い合う。

上演された作品、拙作「雨降り小僧」。「ここは幸子の家です」という作品はどちらも登場人物は二〜三〇人と多く、時間も一時間以上かかる。二本続けての上演は相当大変である。舞台装置は一本は閉山した炭鉱跡地、もう一本は昔の農村、村外れの橋の上とリアルな指定がある。

生徒達はどちらも手作りだがっちり装置を建てるという。「簡略化、抽象化しても良いですよ」と言う私に対し「いいえ、がっちりです。勉強ですから」とメールが来た。私は嬉しくなりこれはどうしても観に行かなければと斜里を訪れたのである。

八月、リーダーの教師が突然札幌のわが家へ上演許可

を貰いにやってきた。そして上演にあたっての作者の注文・アドバイスを御願いますと言う。そして次々に質問しメモを採っていく。その迫力に私は圧倒された。

数年前までは「荒れた学校」だったという。ネット調べるとスマホ使用時間が全道平均をはるかに超えていたらしい。《これでは駄目だ、皆で一つになり皆で熱中できる何かをやらう》という声が教師や父母や一部生徒達から沸き起こってきた。そして実現したのが春の体育祭であり秋の文化祭だったという。リーダーを中心に若い教師陣が結束して生徒達の中に飛び込んだ。

大道具制作等裏方仕事も含め、稽古は始業前の「朝練」である。受験講習のためではない早朝登校は少し抵抗感もあったと語る生徒もいたが、「創る喜び」が全てを包み込んで集団をどんどん前進させたらしい。私が訪れた斜里中には新鮮な勢いとしつかりした生活習慣が根づいていた。

文化祭は大成功。予想を超える感動的なステージであった。私は掌が痛くなるような拍手を惜しみなく送り続けた。

全校が燃える演劇創りは、来年度または私の脚本を選んでくれた。白血病で苦しむ高校生の男女が親にも言わない医者にも教師にも言わない死の恐怖の苦しみを分かち合っていくという、甚だ難しい内容の脚本である。しかも劇全体を「平家物語の群読」を使いながら進行させていくという高度な演出技術の指定を課している。そこだけは、作者としては妥協できない。中学生達がどう演じるか、今からワクワクしながら待っている。

三、リーダー伊藤俊哉先生の報告。

生徒の価値観を演劇で変える挑戦

斜里中・巡回指導教諭 伊藤俊哉

三年前、網走から斜里へ転任してきた。当初斜里中は未整備のことも多く生徒はエネルギーはあるが何か物足りない雰囲気があった。行事レベルは低い。そこでまずは物事への価値観を高め充実した参加意識を持たせられないかと考えた。その取り組みの具体の一つが「演劇」であった。私自身演劇は素人、ただ文化祭などを通して「演劇の魅力」のようなものは感じ取っていた。そして、なんとかして斜里の生徒達に本物の演劇の雰囲気を感じて貰いたいと思っていた。

丁度その頃、私は一冊の脚本集と出会った。菅村敬次郎作「あしたは天気」である。その中の一作《地底へ》はオホーツクでは広く知られた作品であり、演劇に力を入れる学校なら一度は取り組みたいという名作である。思い込んだらそのまま突っ走ってしまうのが私の悪いクセ。難しくそうだがやらう、挑戦しようと思った。夏、全く一面識も無い菅村先生に突然連絡し、札幌のご自宅へ押しかけた。先生は快く迎え入れ、激励と共に細かいアドバイスを下さった。



ここは幸子の家です

以来二年間に、『地底へ』《あしたは天気》『雨ふり小僧』《こは幸子の家です》の計四作を上演した。レベルは高くは無いらうが、生徒達の頑張りと教職員のチームワークと菅村脚本のお陰で舞台は大成功となった。

この演劇創りの成功が自信と喜びを生み、更なる進化・工夫へ発展し来年度に向けて生徒達を動かし始めたようだ。最近、来年度もぜひ菅村脚本をといて声が聞こえてくる。

菅村先生ご自身に斜頂ぎ、閉会式で暖かい御講評を頂いたことは学校としても嬉しい出来事であった。なにより生徒達と若い教師達が、挑戦することの楽しさと創り出すことの感動を頂いたと思っっている。

観劇した父母の感想

★やられました。ラスト、娘が前を見つめて微笑む姿とその背中に懸命に語りかける母親の涙がしっかりと伝わり、私も思わず涙がこぼれました。（ここは幸子の家です）

★『雨降り小僧』の信じ続ける心の強さに対し『忘れてしまふ人間』とが対比され、分かり易くしかも深い劇でした。（雨ふり小僧）

★大道具、小道具、効果、照明。皆の気持ち伝わって



雨ふり小僧

きました。来年も大期待です。

他の仕事をしていた教職員の感想

★毎日早朝から頑張ったからこそ良い劇が出来たのですね。遠目から応援していましたよ。

★舞台配置も観客の視線を横方向だけではなく縦方向にも向けさせる演出の工夫に驚きました。感情のこもった皆の演技に引き込まれました。感動をありがとう！

.....

以上が、斜里・伊藤先生から寄せられた感想・報告である。学校活性化を目指した挑戦は確実に成果を挙げることが出来たようだ。

かつてこのオホーツク稜線には「オホーツク演劇斜面」と呼ばれる劇創り活動があった。劇作家石原敬三をリーダーに、北見・紋別の小中学校を中心に活発な劇創り教育が展開された。最近では北見・新井繁、網走・溝口勲を中心とする高校演劇指導者による劇活動が活発である。中でも北見北斗高校・新井繁の創作劇は全国でもトップレベルの評価を得ている。また紋別には北海道演劇集団理事長・五十嵐陽子がいる。全道のアマチュア演劇を牽引している。北見の老舗劇団「河童」も息長く健在である。岡田大陸指導の紋別中学も毎年熱のある劇創りに取り組んでいる。

斜里中学の挑戦は今、自校の学校改革だけでは無く北辺の劇創りとしてオホーツク沿岸全体に新たな息吹を生みだし始めている。かつて稚内南中学が「よさこいソー

ラン）を通して荒れた学校の建て直しに成果を挙げマスコミの注目を受けた、斜里中学の挑戦は更に広い視点での可能性を秘めているようだ。

四 風車は唸ってる

苦前町民演劇の活躍

北辺の劇創り、最初の紹介がオホーツクの流水の厳しさに負けない演劇活動であるとすれば、次は左側稜線、留萌の少し上に位置する苦前の町民演劇の紹介である。それは、「風に立ち向かう劇創り」と呼ぶのが相応しい。大地と歴史にしっかりと根をおろし、暴風雪にも一歩も引かない劇創りである。



苦前町。人口三三三二人（平成二八年一月末現在）。一〇年前に比し二〇%以上の人口減少中だという。発電のための巨大風車がずらりと並ぶ光景は道北の風物詩として有名である。四三回を数える全道風揚げ大会はいかにも荒海に向かう風の町らしい。そして海辺の町は根強い。過疎化に悩みながらも今、演劇創りを通して新しい町づくりが進行中である。

この苦前町で一昨年一二月、やはり拙作の戯曲《地底へ》が上演された。近くに旧羽幌炭鉱跡地があるとはいえず、海辺の町からの突然の上演許可願いは驚きであった。しかも北炭夕張の重大事故を描いたこの作品の背景を探る

ため夕張まで現地調査に行つて来たという。一二月、私体が体調崩し、どうしても本番見られずに終わったのが悔やまれてならない。後日送られてきたDVDでも、演技・演出等、相当にレベルの高い劇創りであることが伺えた。北海道に住み演劇に眼を向けていながら今まで苦前町民劇の活動を知らずにいたことが恥ずかしく残念でならない。

そこで、リーダーであり座付き作家である松岡満雄の文を引用する。

苦前町民劇の紹介

町民劇・脚本家 松岡満雄

苦前町の「町民劇」をご紹介します。

平成四年、当時の公民館長が演劇教室を開催し、そこから有志の劇団「井の中のカワズたち」が誕生し『牝熊』（作・佐佐木武麿）を上演しました。それが始まりでした。その後、年に一度、四作品を上演しましたが、指導者不在となり休眠状態となりました。しかし演劇に対する情熱は消えること無く、平成二〇年、北海道文化財団アートプロデュース体験講座を受託し、町民が自由に参加する「町民劇」という形で再スタートすることがになりました。脚本も演出もプロに依頼して出来たのが『風受けて』というオリジナル作品です。劇団のメンバーを核に、高校生から教員、地元よさこいのメンバーも参加し総勢二七人が舞台上がりました。特筆すべきは、なんと取材に来ていた新聞記者までも出演者となって加わり

ました。小学生から六〇代までの町民が一体となったまさに『町民劇』の誕生でした。

以後の上演作品を列挙します。

平成二二年『風受けて』(作・すがの公 演出・斎藤ちず)

二二年『1939・インディガルカ号』

二二年 作・関原暉・演出は以後全て地元町民

二二年『冒険者たち』ガンバと仲間たち』

二二年 作・斉藤惇夫 脚色・湯田克衛

二三年『ルドルフとイッパイアッテナ』

二四年『地球光りなさい!』 作・倉本聰

二五年『ゴジラ』 作・大橋泰彦

二六年『地底へ』 作・菅村敬次郎

二七年『拓一ひらく』 作・松岡満雄 脚色・北毅

二作目からは、全作品演出は町民が担当。照明・音響・舞台美術・衣装などは始めから全て地元町民の手作りです。すから、まさに町民劇と呼ぶに相応しい劇創りでした。

特に、昨年度上演の『拓一ひらく』は、地元苦前町内で一〇〇年前に起きた大惨事、罷が開拓民を襲い七名が死亡三名が重傷を負ったという三毛別大事件を題材にした物語です。脚本は町民である私が書き上げました。団員達の意見とアイデアを聞きつつなんとか上演に辿り着きました。郷土芸能の太鼓も出演し、まさに『オール苦前』と言える舞台の誕生だったと思います。幕が降りた時、キャスト・スタッフのみならず観客も感動を分かち合い、喜びを共にして下さったと実感出来ました。

この拍手・笑い・涙の中で誕生し出来上がった舞台と観客の一体感こそが次へとつながっていく本当のエネ

ルギーだと私は思います。

『苦前町民劇』はこれからも新たな町民の参加を得ながら、文化を通じた町づくりを担っていききたい、私自身が楽しみながらそれが出来るのではないかと、そう思っています。今は苦前を離れて暮らしている青年がこの劇創りに参加するため休暇を取って戻って来たり、厳しい一二月の天候の中会場へ足を運んでくれた多くの町民の姿に、つい笑顔が浮かんでくる私と町民劇の仲間達です。

五. 劇作家、松岡満雄のねばり

前項の文を書いた『苦前町民演劇リーダー』松岡満雄は、本職は僧侶である。真宗大谷派・広円寺の住職として忙しい日々を送っている。町内、留萌管内はもとより、法要等のため札幌まで足を伸ばすことも少なくない。そういう超多忙の中でも松岡は地元拘ってきた。脚本も舞台も演技・演出も全て手作り、扱う素材もテーマも全て地元発信の劇創り、苦前ならではの劇創りである。そこにこそ町民劇の狙いと価値があると考え続けてきた。その集大成とも言うべき挑戦がついに二〇一五年実現した。

当日プログラムからその論旨を引用する。

『今年には三毛別熊事件が起きてから一〇〇年。胎児を含めて七人が犠牲になった。仕留められた熊は体長二・七m、



脚本家 松岡満雄



重さ三四〇kg。この惨劇の様子は吉村昭「熊嵐」にリアルに描かれている。苫前と言えば熊嵐と、イメージが定着しかかっている感さえある。

しかし、今年の町民劇はこの出来事を単なる惨事としてではなく、「人間と動物の共生」をテーマに据え、「拓く」世界を探り、将来の苫前目指して我々は何をどう拓いていくべきかを町民と共に考えてみたかった。』

当日、三七七席ホールは満席となり補助パイプ椅子を出しての応対が大変だったという。これは凄い。人口三四〇〇人の町にとってはそれこそ事件とも言える観客数の公演であった。

ユーモアに富んだ語り口と温かい松岡の人柄が見事なリーダーシップとなり、北辺の劇創りはこれからも前進

していくだろう。

六・おわりに

北海道の冬は厳しい。これを書いている今日も斜里は猛吹雪、学校は全て臨時休校だ。苫前も今夜から大荒れの天候になるとTVが繰り返し伝えていく。JRが全線運転中止になる可能性もある。私も連日除雪に追われて身体がきつい。春、雪開けから準備を始め秋から冬にかけて本番を目指す《北辺の劇創り》は、だから自然との根比べでもある。

けれど、斜里の中学生達が《朝練》に通ってくる顔は吹雪の中でも爽やかなことだろう。今は地元から離れて札幌や旭川や小樽で暮らしている元《町民劇参加者達》が、一二月になると何人もお里帰りして来て《俺に主役をやらせろ、まあどんな役でもいいから・・・》と主張するユーモアは、苫前町へ常に新しい風を吹き込んで新鮮だろう。楽屋風景や稽古場便りが送られて来るたびに、私はいつも吹き出さずにはいられない。

北辺の劇創り、いつかまた続編を書きたいと心から願っている。



「拓く」稽古場風景